様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３７１０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２９６０

研究課題名（和文）植民地支配の記憶と歴史摩擦に関する実証的研究――追悼碑をめぐる軋轢現象を通して

研究課題名（英文）The Memorial Issue in Japanese Society　: Through the Case in Iizuka City

研究代表者
大和　裕美子（YAMATO, Yumiko）

九州共立大学・経済学部・准教授

研究者番号：００７７９７６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、追悼碑をめぐる軋轢現象について、福岡県飯塚市納骨型追悼碑無窮花堂を事例に考察した。無窮花堂への異議申し立てを行う団体に関する資料を収集し、異議申し立ての対象となった背景を明らかにした。無窮花堂を「問題」視する文脈では「筑豊人」というワードが繰り返されていた。地域への愛着やアイデンティティを揺るがしかねない「負の歴史」への対抗記憶として「栄光の歴史」が台頭し、衝突していると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1990年代前後、日本統治期に日本で命を落とした朝鮮半島出身者を追悼する目的で市民によって追悼碑が建立された。それに対し「市民」が異議申し立てを寄せ始めたのは、2010年代中頃のことである。「市民」間での意見や認識の相違は、ある団体内部をのぞいてみれば多様な意見や考えがあるというレベルを超え、日本社会で「埋められなかった溝」が、追悼碑が示す記憶に反対の意を強く示す人たちと、それを守ろうとする人たちの衝突、軋轢として噴出しているものと考察した。本研究では国際文化学的に、直接的に人々の生活、人々の生きかたに影響を及ぼす国際関係の現象として分析した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to consider the Memorial Issue in Japanese society presenting some point of views and analyzing the movements that criticize the memorials, focusing on a case, “Mugunghwa Dang”（無窮花堂）in Iizuka City. In the case, some groups asked the inscription of the memorial to be revised.
The analysis of the case revealed some aspects of resistance to the recognition of memory as the "only correct" official memory. In addition, this case study in Chikuho revealed the aspect of resistance to memory as "negative history," which is further accelerated by the increasingly negative image of the area after the closure of coal mine.

研究分野：国際関係論、社会学

キーワード：追悼碑　市民　記憶　軋轢　朝鮮

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

1990 年代以降、日本各地で追悼碑を建立する運動が展開された。各地の追悼碑は、日本で命を落とした朝鮮半島出身者を日本の植民地支配犠牲者として位置づけ、反省を碑文に刻み追悼する目的で建てられた点で共通する。それらの撤去や碑文の修正を要求する団体とそれに抵抗する建立団体・支援団体とが対立する現象が各地で生じ始めたのは、2010 年代に入ってからであった。

批判の対象となっているのは、碑文に「植民地」「強制連行」「犠牲」などの文言が並び、かつ公有地の提供するなど、地方自治体が建立に関わった追悼碑である。議会や裁判での訴え、ヘイトスピーチとインターネット上での動画配信などの手段で抗議活動が展開される。本研究ではこの動きを草の根における歴史摩擦問題として捉えて、論を展開した。

歴史摩擦問題に関する草の根の動きとして、これまでいわゆる「草の根保守運動」の実態に光を当てた実証研究がある(小熊英二ほか 2003 など)。それは少数にとどまっていたものの、近年ヘイトスピーチが社会現象として取り沙汰されるなか、「草の根保守運動」を対象とする研究も実証的に行われ始めた(研究開始当初の研究では、在特会、ヘイトスピーチに関するものに松岡瑛理 2016;樋口直人 2017; 前田朗 2017 など)。

２．研究の目的

本研究では個々人の次元に分け入り、地域的文脈や地域的アイデンティティ、個人の経験などと絡み合う様相を浮かび上がらせ、追悼碑をめぐってローカルな場で人びとがどのような考えでいかなる主張を展開したのか、その背景はどのようなものだったのかを明らかにすることを目的とした。そのような作業を積み重ね、現状の理解を試みることが、軋轢や対立ではなく相互理解の道へ向かう可能性を模索することになると考えた。

３．研究の方法

本研究では、福岡県飯塚市の納骨型追悼碑無窮花堂を事例に取り上げた。先行研究の多くが着眼するように、保守市民運動として考察可能な事例であると思われるが、本研究では、関連する団体との関係性や動員の仕組み、資源といった社会運動論的論点ではなく、ローカルな特徴がどのように絡み合い、展開されているかを論じることを主眼とした。追悼碑という、ある地域に建つ表象をめぐる軋轢現象を取り上げる本研究の特色となり得ると考えたからである。

無窮花堂が建つ飯塚市は、かつて石炭採掘が盛んに行われた筑豊の中心地であるが、この飯塚市営霊園に建つ無窮花堂を問題視する声があった。本研究では、地域的文脈のなかに、この現象を位置づけ、異議申立てをする側に焦点を当て、団体の性格や特徴を明らかにするとともに、市議会会議録やメンバーへのインタビューなどを通して、追悼碑への認識を考察した。

４．研究成果

無窮花堂への批判が表面化したのは 2014 年以降で、「国際交流広場の正常な運営を求める会」と「早乙女会」という２つの団体によって、碑文の修正を要求された。両者のあいだに

連携はなかった。

「国際交流広場の正常な運営を求める会」は 2015 年に結成された。日本会議の会員であるメンバーもいるが、そうではない人もいる。早乙女会は「在日特権を許さない市民の会（**在特会）」を**ルーツとする団体である。両団体のうち、本研究では、会名にあるように、無窮花堂のみに焦点を当てて取り組む「国際交流広場の正常な運営を求める会」(以下、求める会) を中心に取り上げた。

「求める会」の主メンバー**は、筑豊で育ち、筑豊炭鉱を直接的に記憶する人物であった。**A 氏個人が始めた活動に「志を共にする」人たちが集まり、求める会はつくられた。無窮花堂とは別の話をきっかけに A 氏と出会ったのが、飯塚市議会議員であった藤浦誠一議員である。A 氏の個人名や求める会の名前で飯塚市へ陳情書を提出し、共同代表の一人となった藤浦議員が、議員として市議会で陳情を取り上げて質問をする、というのが求める会の意見表明のスタイルであった。

求める会が「問題」視するのは、①碑文の内容、②「強制連行」された年代に亡くなったのではない遺骨も納められている点、③国際広場における無窮花堂の占有、④英語版パンフレットの表記、の４点である。ほかに、労働会館が事務局となり集会に利用されていることなどが問題とされていた。

「求める会」や A 氏の主張で、繰り返されるのが「**筑豊人」というワードである。閉山後、加速する筑豊の負のイメージに、さらに拍車をかける記憶の象徴として無窮花堂が捉えられ、それへの抵抗として、無窮花堂をめぐる軋轢現象が当該地域で生じているものと把握された。すなわち、地域への愛着やアイデンティティを揺るがしかねない「負の歴史」への対抗記憶として「栄光の歴史」が台頭し、衝突していると考えられる。**

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 大和裕美子	４．巻 20
２．論文標題 「紛争・和解と記憶の共有」におけるキーワードの特徴と国際文化学としての意義	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『インターカルチュラル』	６．最初と最後の頁 74-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大和裕美子	４．巻 21
２．論文標題 追悼碑における記憶の衝突――福岡県飯塚市納骨型追悼碑無窮花堂を事例に	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『インターカルチュラル』	６．最初と最後の頁 192-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57496/jsics.21.0_19	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大和裕美子	４．巻 21
２．論文標題 ［書評］『和解をめぐる市民運動の取り組み―その意義と課題』外村大編（明石書店、2022年）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『インターカルチュラル』	６．最初と最後の頁 230-233
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57496/jsics.21.0_230	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大和裕美子	４．巻 19
２．論文標題 草の根の国際関係論を論じる場としての国際文化学	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『インターカルチュラル』	６．最初と最後の頁 38-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 大和裕美子
2．発表標題 長生炭鉱水没事故の市民運動 ―追悼碑建立運動を中心に―
3．学会等名 東京大学韓国学研究センターシンポジウム「戦後補償問題と日韓の市民運動」
4．発表年 2021年

1．発表者名 大和裕美子
2．発表標題 追悼碑にみる朝鮮人の記憶の形成と葛藤：福岡県飯塚市無窮花堂を事例に（邦訳）
3．学会等名 韓人ディアスポラのトランスローカルティ的生活とデータベース構築方案プログラム（邦訳）（慶北大学社会科学研究院主催国際シンポジウム）
4．発表年 2019年

1．発表者名 大和裕美子
2．発表標題 追悼碑をめぐる軋轢問題にみる記憶の衝突――福岡県飯塚市「無窮花堂」を事例として
3．学会等名 日本社会学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 大和裕美子
2．発表標題 追悼碑への「バックラッシュ現象」―― 福岡県飯塚市「無窮花堂」を事例に
3．学会等名 日本国際文化学会
4．発表年 2021年

１．発表者名 大和裕美子
２．発表標題 追悼碑をめぐる問題―福岡県飯塚市無窮花堂を中心に
３．学会等名 九州韓国研究者フォーラム
４．発表年 2022年

１．発表者名 大和裕美子
２．発表標題 書評会『和解をめぐる市民運動の取り組み』（明石書店、2022年）をめぐって
３．学会等名 新学術領域研究・和解学の創成－正義ある和解を求めて（領域代表・早稲田大学　浅野豊美）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関